

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531225

研究課題名(和文)新しい地理教育フレームワークに基づく地誌授業モデルの開発・検証

研究課題名(英文)Development and Verification of a Regional Geography Class Model based on a New Geography Education Framework

研究代表者

中本 和彦(Nakamoto, Kazuhiko)

四天王寺大学・教育学部・准教授

研究者番号：80513837

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、今日の様々な地誌学習の実践課題を踏まえ、地誌学習を類型化している従来の枠組みを検討し、新たな地理教育フレームワークを考察、提案し、その枠組みに基づいて地誌学習の授業モデルを開発・検証しようとした。文献調査などにより、新たに地誌学習を4つに類型化し、より社会認識形成において有効な地誌学習の授業構成論を明らかにすることができた。さらに、中学校・高等学校教員への聞き取り調査などを踏まえ、より社会認識形成に資する地誌学習の授業モデルを開発・提案することができた。

研究成果の概要(英文)：This study reviews the conventional framework that classifies Regional Geography education based upon the various practical challenges facing it today. It also examines and proposes a new framework for Geography education, and attempts to develop and verify a Regional Geography Learning Class Model based on this framework. Through newly classifying Regional Geography education into four categories, based on a literature review, it was possible to elucidate a theory of class construction for effective Regional Geography education aiming for better social recognition formation. Furthermore, based on a hearing survey with junior and senior high school teachers, it was possible to develop and propose a class model for Regional Geography education that will contribute to an improved social recognition formation.

研究分野：教科教育学

キーワード：地理教育 地誌学習 授業開発 社会科教育 フレームワーク 社会認識 授業モデル アメリカ

1. 研究開始当初の背景

(1) 学習指導要領の改訂に伴う地誌学習の現状と課題

平成 20 年 3 月に告示された中学校の学習指導要領社会編においては、「動態地誌的な学習による国土認識の充実」が図られ、具体的には、「主題的な地誌学習」と「中核方式」と呼ばれる地誌学習がみられるようになった。しかし学習指導要領に取り入れられた「動態地誌的な学習」と「主題的な地誌学習」と「中核方式による地誌学習」の明確な違いやそれらをどのように授業化するのかが明確にされていない。

また、平成 21 年 2 月告示の高等学校学習指導要領の地理 B においては、地誌的考察方法として「取り上げた地域の多様な事象を項目ごとに整理して考察」、「取り上げた地域の特色ある事象と他の事象を有機的に関連付けて考察」、「対照的又は類似的な性格の二つの地域を比較して考察」するという、三つ（「静態地誌」「動態地誌」「比較地誌」）の地誌的考察方法が示された。そこでは、地名物産の羅列網羅する地理として批判された窓方式による「静態地誌」は依然として継承され、その正当性は明確ではない。また、これまで地誌学の研究方法として「静態地誌」と「動態地誌」の二つが中心とされてきたが、「比較地誌」という新たな方法が加えられた。しかし、その「比較地誌」と「静態地誌」、「動態地誌」との関係や違いは明確ではない。

(2) 地誌学習についての学会等の動向

日本地理教育学会では、2010 年 2 月に「動態地誌学習をどう実践するか」をテーマに地方例会が開催された。そこでは、前教科調査官によって動態地誌学習導入の背景・理由などが述べられ、中学校、高等学校教員から動態地誌学習の実践報告・提案がなされ、活発な討論が行われた。また、それに先だって全国地理教育学会では、2008 年 11 月に、シンポジウム「地誌学習の復権と展望」が開催された。小・中・高・大学からのパネリストによって、中学校・高等学校における地誌学習の在り方を中心に活発な討論が行われた。教育雑誌においても、『教育科学社会科教育』2009 年 11 月号で、特集「新“地誌”学習でつくる年間計画プラン 36」が生まれ、「新地誌学習」をキーワードに数多くの研究者、中学校教員からの論文が寄せられた。

しかし、上記の諸提案・討論・論文等は、個別の各用語についての解説に留まる、あるいは用語についての各論者の解釈に基づく個別の提案・実践報告に留まったものが多く、地理学習全体を見通して地誌学習を位置づけ、それぞれの地誌学習の異同を、授業レベルにおいて明確に説明、峻別するには、疑問が残るものとなっている。

(1)(2)のような現状と課題を踏まえると、今日の多様な地誌学習を位置付ける新たな

枠組み(地理教育フレームワーク)が必要である。また、その枠組みで類型化され、今日の地誌学習の課題解決により資する授業モデルの開発・検証が必要である。

2. 研究の目的

本研究目的は、新学習指導要領中学校社会地理的分野、高等学校地理歴史科地理 B において新たに導入された様々な地誌学習の授業化への当惑した問題状況を踏まえ、地誌学習を類型化している従来の枠組みを検討し、地誌学習も含めた地理の新たな地理教育フレームワークを考察、提案し、その枠組みを用いて実際の授業を類型化するとともに、それに基づいた現状の改善に資する地誌学習の授業モデルを開発して実践し、その実現可能性・有効性について検証することである。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するため、以下の 5 つの方法をとる。

学習指導要領や従来の地理教育の内容編成原理を抽出するための文献の収集、分析。新しい地理教育フレームワークを提案するための社会科教育学、社会認識形成に関わる文献の収集、分析。

従来の地理教育の内容編成原理の分析、検討。

新しい地理教育フレームワークの構築と従来の地誌学習の類型化。

地誌学習の授業モデル開発・検証。

一連の成果について、学会、研究会等を通して社会に発信する。

4. 研究成果

(1) 新しい地理教育フレームワークの構築とそれに基づいた地誌学習の類型化を行った。

具体的には、地理教育の「社会化」論の類型をもとに地誌学習の特質と限界を分析できるフレームワークを構築し、今日みられる地誌学習を「認識対象」と「視点」という 2 点から類型化し、より社会認識形成において有効な地誌学習の授業構成の論理を明らかにした。

その結果、今日みられる地誌学習は、社会認識形成の視点から以下の 4 つに類型化できることが明らかになった。

地理科地誌学習

地理科社会地誌学習

社会地理科地誌学習

社会科地理地誌学習

そして、以下の教科書や実践などを取り上げて各類型に位置付け、各地史学習の特質を明らかにすることができた。

「北アメリカ州」、中村和郎ほか『社会科 中学生の地理』帝国書院、平成 24 年、pp.78-89

佐々木孝夫「世界の諸地域 北アメリカ」、『歴史地理教育』2012 年 3 月増刊号、pp.37-42

石川照子「アメリカ 自由・競争・格差」, 連合研究科共同研究プロジェクトI (平成 20-22 年度) 最終報告書 (草原和博・西村公考代表) 『社会系教科目の授業実践を支援する学習材の開発 教師・学習材・子どもの相互関係の解明をめざして』兵庫教育大学連合学校教育学研究科, 平成 23 年 3 月, pp.66-82

中本和彦「地歴科地理・単元『ラテンアメリカ』の教育内容開発 理論を中核にした州・大陸規模の地誌学習」, 『社会系教科教育学研究』第 14 号, 2002 年, pp.33-42

以上のような類型化をもとに, 社会認識形成においてより有効な地誌学習が, の「社会科地理地誌学習」であることを明らかにした。

その成果については, 「社会認識形成のための地誌学習『地理で教える』の再検討」全国社会科教育学会第 61 回研究発表大会(課題研究), (岐阜大学, 2012 年 10 月 21 日) において口頭発表した。

(2) 類型化に基づいて, 社会認識形成においてより有効な地誌学習の授業モデルを, 単元「アメリカ」を取り上げて開発することができた。

その成果については, 「中等地理・単元『アメリカ』の教育内容開発 社会認識形成のための地誌学習」社会系教科教育学会第 24 回研究発表大会自由研究発表(第 6 分科会), (兵庫教育大学, 2013 年 2 月 9 日) において口頭発表した。また, これらの成果を踏まえて, 中学校教員によって組織された任意の教育研究団体(授業のネタ研究会)においても口頭発表を行い(「様々な地誌学習とその射程」授業のネタ研究会 I N 関西第 30 回記念大会(弁天町市民学習センター, 2013 年 3 月 24 日)), 実際の学校現場における実現可能性などについて批判・検討を行い, 概ね満足のいく結果が得られた。加えて, 日本学術学会シンポジウム「高校地理歴史教育に関するシンポジウム」(東京大学, 2014 年 6 月 14 日) などに参加し, これらから得た知見を踏まえながら, 地誌学習の類型化と授業モデルの精緻化を図り, その成果について, 「中等地理・単元『アメリカ』の教育内容開発 科学的社會認識形成のための地誌学習」日本地理学会 2014 年度日本地理学会秋季学術大会シンポジウム「学校における地誌学習の現状・課題・展望」(富山大学, 2014 年 9 月 21 日) にてシンポジストとして口頭発表を行った。また, その内容については, 『E-journal GEO』Vol. 9(2), p.221, 2014 年に掲載されている。

授業モデルの具体の一部は, 以下のようなものである。

単元「アメリカ合衆国」の教育内容開発の実際

単元の目的

ア) 「アメリカの世界化」を, 自動車工業を事例として, 資料をもとに批判・吟味しながら習得する(アメリカニズム)

イ) 「世界のアメリカ化」を, マクドナルドを事例として, 資料をもとに批判・吟味しながら習得する(アメリカニズム)

ウ) コーポラティズムによる富の大企業への集中を, SNAP (旧フードスタンプ) を事例として, 資料をもとに批判・吟味しながら習得する。

エ) ウ) で習得したコーポラティズムを用いて, 他の事例に活用し, 吟味する。

オ) ア) ~ オ) を習得するごとに, 「アメリカとは何か?」を解釈し, 自らの解釈を他者の解釈を参考に批判・吟味し, より説明力の高い解釈へと修正させる。

到達目標

アメリカは, 「民主主義」と「自由」の理念によって幸福追求 (= 消費) がめざされ, それによって統合され, またその理念を世界に拡大させている。(アメリカニズム)

- 1 アメリカは, 世界各地から流入する移民を『民主主義』『自由』という理念とそれを実現させる消費資本主義によって統合している(アメリカの世界化)。

- 2 アメリカは, 消費資本主義というシステムは, 世界各地に受容され, アメリカ的価値としての「民主主義」や「自由」が世界に広がっている(世界のアメリカ化)。

その一方で, アメリカは, 政府と大企業が結び付き, 大企業に利益が集中し, 抜け出せない貧困層との間で貧富の格差が拡大している。(コーポラティズム)

- 1 アメリカは, 政府と大企業が大統領の幹部への登用や政治資金などによって結び付き, 法改正, 規制緩和, マスコミ・情報操作などによって大企業に有利な施策がとられ, 大企業に富が集中し, 「自由」な競争による失敗は個人責任のもと中流層を崩壊させ, 抜け出せない貧困層を増やし, 貧富の格差を拡大させている。

- 2 たとえば, 以下のような問いに対して, コーポラティズムを活用しながら, 文献をもとに説明する。

「なぜ, アメリカでは, 銃規制が進まないのか?」

「なぜ, アメリカでは, 農家の数が減少し, 農場の大規模化が進んでいるのか?」

「なぜ, アメリカの州では, 刑務所の民営化が進んでいるのか?」

「なぜ, 台風カトリーナのあと私立の学校が増えたのか?」

「なぜ, アメリカの大学生は奨学金の返

済に苦しむのか？」 など
単元の指導計画(全5時間)
1)アメリカってどんなところ?(1時間)
2)車社会アメリカ(1時間)
3)マクドナルド化する世界(1時間)
4)ウォルマートが支配するアメリカ
(1時間)
5)民主主義?アメリカ(1時間)
授業展開(省略)

(3) 開発した授業モデルをもとに、実際の中・高等学校の現場教員の意見なども踏まえながら、実践可能性などについて批判・検討を行い、学習材『アメリカっていったいどんなところ?』を、完成させることができた。このことによって、授業モデルの提案、あるいは開発者による検証授業の実施にとどまっていたこれまでの授業開発研究、教育内容開発研究を、開発者以外の現場の教員が実践可能な形へと研究を漸進させることができた。なお、実際の本学習材を用いた検証授業の実施・検証・分析は、今後の継続課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Kazuhiro Nakamoto, "Development of a virtual survey of a familiar region to develop students' content and method wisdom: "Why is the shopping center located where a factory used to be?" The journal of Social Studies Education, Vol.1, 2012, pp.29-44

(査読なし)

中本和彦「ゲートキーピング論からみた学校現場におけるESDの諸相 ESD実践の類型化が教科教育に示唆するもの」日本教科教育学会『日本教科教育学会誌』,第36号第4号,2014年,pp.121-124(査読なし)

中本和彦「中等地理・単元『アメリカ』の教育内容開発 科学的社會認識形成のための地誌学習」日本地理学会『E-journal GEO』Vol. 9(2), 2014年, p.221

DOI:http://doi.org/10.4157/ejgeo.9.219

(査読なし)

[学会発表](計7件)

中本和彦「エネルギー・環境問題をめぐる不易と流行 『社会科でも、社会科教育でしか、社会科教育でこそ』」社会系教科教育学会,2012年2月19日,兵庫教育大学(兵庫県)

中本和彦「地理教育の可能性を広げる中等地理授業の開発 最適居住空間の創造を求めて」地理教育懇話会(地理科学学会地理教育・ESD研究グループ)2012年3月

24日,広島大学附属中・高等学校(広島県)
中本和彦「社会認識形成のための地誌学習 『地理で教える』の再検討」全国社会科教育学会,2012年10月21日,岐阜大学(岐阜県)

中本和彦「中等地理・単元『アメリカ』の教育内容開発 社会認識形成のための地誌学習」社会系教科教育学会,2013年2月9日,兵庫教育大学(兵庫県)

中本和彦「様々な地誌学習とその射程」授業のネタ研究会,2013年3月24日,弁天町市民学習センター(大阪府)

中本和彦「ESD導入にみるゲートキーピングの諸相」日本教科教育学会,2013年11月24日,岡山大学(岡山県)

中本和彦「中等地理・単元『アメリカ』の教育内容開発 科学的社會認識形成のための地誌学習」日本地理学会,2014年9月21日,富山大学(富山県)

[図書](計5件)

社会認識教育学会編(小原友行,木村博一,草原和博,原田智仁,池野範男,棚橋健治,大杉昭英,中本和彦)『社会科教育実践ハンドブック』明治図書,2011年,236p.
小原友行,永田忠道,中本和彦他『「思考力・判断力・表現力」をつける中学地理授業モデル』明治図書,2011年,136p.

大杉昭英,草原和博,中本和彦他『中学校新社会科地理の実践課題に応える授業デザイン』明治図書,2011年,103p.

草原和博,渡部竜也,中本和彦他『“国境・国土・領土”教育の論点論点 過去に学び、世界に学び、未来を拓く社会科授業の新提案』明治図書,2014年,200p.

原田智仁,峯明秀,中本和彦他『社会科における「思考・判断・表現」の評価に関する研究』日本教材文化研究財団,2014年,191p.

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

中本 和彦(四天王寺大学)

研究者番号:80513837

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号:なし

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号:なし